

夏休み、河原で虫取りをしていた博士は四歳年上のガキ大将ムルチのグループと会った。「探検」に行くと聞いた博士は泣かないことを約束し、連れて行ってもらったことになった。

湿地を大きく迂回するとまた川沿いの道に出た。今度は土手がなく、格段に細くなった川の際をそのまま歩いていく。片側には舗装されていない道路が並行していて、人通りもあった。だから、まだ遠くまで来たという感じはしなかった。胸から下のほとんども濡れており、靴の中の水のせいで歩きたびにかばかば音を立てた。足の生ぬるく粘った感覚は普通だったらすごく嫌なものなのに、全然気にならなかった。

博士は虫取り網を掲げて振りながら歩いた。ムルチはさっきの一件で木の枝を置いてしまったから、探検隊の中でただひとり旗を振っている気分で、意気揚々としたものだった。

どんどん歩こう。遠くへ行こう。川が始まるのを見えてやろう。自然と言葉が歌になって唇からこぼれ落ちそうだった。土埃が舞い上がっているのが前方に見えた。

その中から小さなトラクターが現れた。いろいろな機材を積んだリヤカーを牽引して、ゆっくりと進んでくる。すれ違う時に博士の鼓動が高鳴った。

同じクラスの由美ちゃんがいたのだ。リヤカーの上にちよこんと座って細長い足を前に投げ出している。夏休みに入ってから登校日以外には会っていない。少し見ない間に背が伸びた感じがするし、髪を後ろで束ねて上げてあるのがすごく大人っぽかった。クラスで一番かわいいと博士は思っていて、でも、それを口にしたことはない。

① 目があった時、博士は自然と胸を張った。ずぶぬれで、足なんて泥がついていて、みすぼらしいはずなのに、それが逆に誇らしくて、ますます大きく網の柄を振り回しながら進んだ。

ほら、見てや。探検隊やで。川の始まりを見つける探検隊やで。心の中でそう叫んだ。

結局、会釈すら交わすことなくすれ違った。サルに頭をはたかれた。

「なんかえらそうじゃん」

それでもしばらくは網を振り続けた。疲れて腕がしびれてくるまでそうしていた。

延々と歩き続けるが、風景は変わらない。里山は意外に遠いのだ。太陽がさらに低くなっているのを感じて、ほんの少し不安が頭をもたげた。

博士は俯いて虫籠の中のトノサマバッタを見た。長い間揺られ続けてぐったりしていたけれど、隙間から指の先でつつくと途端に生き返ったみたいに跳びはねた。それを見て安心した。年長のガキ大将との探検に加わったのは博士だけじゃないのだ。家の前から連れてきたトノサマバッタと一緒に、ひたすら先へと進むのだ。

ムルチはずっとむつりしたままで、ブンちゃんとサルが軽口をたたき合っていた。

「川の始まりってゆうたら、水が甘いんやと。コーラやオレンジジュースよりもうまいって、かあちゃんがゆうとった」

ブンちゃんの言っていることは、なんとなく低学年みたいだと博士は思った。

「そんなわけないじゃん。ブンはかつがれとるんや」

「そうかもしれないわ。父ちゃんは、最初の一滴は甘いんやのうて、酒やってゆうてたしな」

「うーん、どっちにしてもぱっとしねえじゃん。なあ、ハカセはどうなん。どうしてついていたん。探検が好きなんか」突然話を振られて、博士はどぎまぎした。なかなかうまく言葉が出てこない。というか、なぜなのか自分でも分からない。

「なんや、ハカセやつたらいろいろ考えとるのかと思ったで。つまんないじゃん。そや、家の前通るとき、母さん呼んどったやろ。今頃心配しとるんちゃうか」

博士は首を横に振った。母さんのことを今は考えてはいけなとどこかで思っていた。考え始めたらきりが無い。

それに、母さんはムルチとは遊ぶなってよく言っているのだった。ムルチは新興住宅地の区画の中でただ一ヶ所古くからある長屋に、父親と二人で住んでいる。その住人たちは、とにかく喧嘩早くて評判が悪い。おまけにムルチの父親は有名な酒飲みだった。だから、博士がムルチについていったと知ったら、母さんは怒るに決まっているのだった。

「なら、そっちはどうなん。考えとるの」

博士は必死の思いで言葉を絞り出した。

サルはふふん、というかんじで「当たり前じゃん」と応えた。

「川はな、流れていくと海につながるやろ。逆に源まで行ったらどうなると思う」

「どこから水が湧いとるんやろ」と博士。

「そやけど、そこから先の話」

「土の中で甘い水をつくつとるモグラの一族かなんかがおって……」

「アホか！」

サルがブンちゃんの頭をはたいて、空を指さした。

「雨が降るじゃん。それが土の中に入って地下水になって、また表に出てきたのが集まって川になるわけや。とすれば、川は空から降ってくる」

サルはニヤリと笑った。すごく真面目なことを言ってるくせに思い切りサルっぽくなる。

「よう考えや。つまり、川というのは、空から来て、海へ行くもんや。空と海をつなぐもんや。としたら、きょうわしらは、山を登って空まで行くことになるじゃん」

博士は思わず空を見上げた。

「すごいわ。空に行くんかあ」

② 探検の意味がにわかにはつと色づいて、まるでこれからロケットに乗って月に行くとも言われたみたいに胸が高鳴った。

ふたたび気持ち乗ってきたので、虫取り網を旗のように振る。どんどん歩く。靴はやつと水気が抜けて、湿ってはいけるけれど、かばかば間抜けな音を立てなくなった。かわりにさつ、さつ、と草を擦る軽快な音が続いた。

突然、前方からざつと強く地面を踏みしめる音が響いた。

ムルチが立ち止まり、こつちを振り向いた。

「理由なんてどうでもええんじや」

低く掠れた声なので、それだけで凄んでるように聞こえた。いや、本当に凄んでいたのかもしれない。目はいつにも増してギョロリと剥いて、口元はねじれそうに歪み、どことなく思い詰めた風でもあった。

「また難所やで。ここからは、難所につぐ難所や。音を上げたら連れていかへんで」

ムルチの背後には間近に迫った里山が覆い被さっていた。

里山は昼でも薄暗い。夕方が近いとなるとなおさらだ。

雑木林を縫って頂上まで続く細い道がある。でも、川を追いかけていくためにはその道をすぐに捨てて、さらに暗く、足下の悪い林の中を歩かなければならなかった。ここまで来ると川は博士でも跳び越せそうなほど細くなっていたけれど、水の量は結構なものでまだまだ終点は遠そうだった。

林の中はひんやりしていた。さっきまでは低くなった太陽の光が体に当たってぽかぽかしていたのに、ここでは濡れたシャツや半ズボンが肌寒いほどだった。地面は湿って気持ち悪く、また、体の大きな蚊がたくさん飛んできて剥き出しの足や手や首筋を片っ端から刺していった。蚊を叩くビシャツという音がいつも誰かから聞こえてきた。

ムルチは足を緩めない。ヒルのことはあんなに怖がったのに、蚊は全然気にならないらしい。遅れないためにはブンちゃんとサルも小走りになるし、すると博士は時々本気で走らなければならなかった。

博士は歯を食いしばって三人を追いつけた。気を抜いたら置いていかれてしまう。ムルチは待つてくれないに違いない。こんなところでほったらかしにされたら大変だ。

虫籠が上下左右に揺れるものだから、トノサマバッタは中で激しく跳びまわっていた。

虫取り網は木の枝にしょっちゅう引っかかっては騒々しい音を立てた。

サルもブンちゃんも無口だった。きつと話をしている余裕なんてなかったのだ。博士なんて話どころか、考える余裕さえなかった。ただ目の前には足下の悪い上り坂があって、それをずっと走り続けるだけで目一杯だった。自然と泣きそうになって、それでも泣かないと約束したことだけは心の底に根を張っていて、ぐっと涙を押し殺した。

斜面はどんどんきつくなり、流れも速くなっていった。川が小さな谷を刻んでいるために迂回してほとんど垂直の崖を一メートルばかりよじのぼらなければならぬところもあった。五年生たちはこともなげに出来たけど、博士ではそうもいかない。崖の断面から突き出している太い木の根に手と足をかけて、やつとの思いで体を持ち上げた。

足には擦り傷ができ、服は全部泥だらけになり、顔には蜘蛛の巣がまとわりついた。博士は悲鳴をあげそうになった。でも、そうすると泣いてしまいそうだと気づいて、やはり噛み殺した。

博士がへとへとなってもうダメだと思った頃、ムルチがやつと立ち止まった。川沿いにはササがびっしりはえていて、それ以上は進めなくなっていた。

「また難所や。しゃあない、いくで」と言つて、迷いもなく川の中に足をつつこんだ。

そのまま脛までの水を蹴りながら上つていく。サルがそれに続いた。でも、ブンちゃんが動かない。

「なあ、そろそろ帰らんか。ちよつと暗くなつてきたで」

ブンちゃんは、蚊に刺されて掻きむしった跡のある肩に両手を回して震えていた。博士はそれで逆にほつとしてムルチを見た。「何をゆうとんじゃ。一年生のハカセかて泣きもせんと来とう。な、ハカセ、おまええらいわ。ほめたる。それに比べてブンはどうじゃ。キンタマが縮みあがつとるんじやろ」

ブンちゃんが鼻水をすすり上げ、「ちがうわい」といきり立った。

博士はムルチに勧められたことがうれしくないわけではなかった。③でも、もつと複雑な気持ちだった。

沢登りが始まった。滑りやすい苔のついた石の上を一つ一つ跳び、ムルチについていった。ここではさすがにムルチもスピードを上げられなかったけれど、その分、博士がついていくのも大変なのだった。

博士は石から足を踏み外し、派手にすっころんだ。うわつと大声を出し、川底の石でざっくりと掌を切った。痛かった。でも、泣かなかった。ムルチがこつちを見ていたからだ。サルが、草の葉を揉んでくれて傷口に押しあてた。

「あ、ハカセ、虫籠どないしたん」

博士は言われたことが分らず、少し考えてから自分の腹を見おろした。

虫籠がなかった。プラスチックのひもが千切れて、虫籠だけが消えていた。

頭の中が白く飛んだ。母さんが夏休みの始まりに百貨店で買ってきてくれたものなのだ。④それにあの中には茶色い大きなト

ノサマバツタがいた。家の前で捕まえて、ここまで一緒に来たのに。

「行くで」ムルチが言い、博士はまた歩き始めた。

足もとがふらふらして何度も転びそうになった。でも、泣かへん、泣かへんと、口の中で繰り返して、そのせいでなんとかまっすぐ立って、歩き続けられた。サルが心配そうに手を差し延べてくれたけれど、博士はそれも無視して自分で歩いた。そうしなきゃならない気がしていた。とにかく川が始まるころまで行かなければ。そうすれば、ムルチも今度は帰ることを考えるはずだし、少し暗くなつてもみんなと一緒になら安心なのだ。

※ 視界が開けた。

踏み固められて歩きやすそうな山道が、川に寄り添っていた。

「なんや、ずつと道を通ってきたら、結局、ここに出たわけじゃん」

ムルチがざろりとサルを見た。サルは言葉を呑み込んだ。

難所は終わり、足下のしつかりした山道が続く。また川が谷を刻んだけれど、道は数メートル上にずっと続いていて、わざわざ川に下りることもなく歩き続けた。

赤い光が目の中に飛び込んできた。

それは、もうすぐ沈む太陽なのだった。

毒々しいまでに赤く染まった空の下、小さな箱庭みたいに世界が広がっていた。

風に揺れる水田と、小さな屋根の群れ。赤黒い血流のような川と、さらに深く沈んだため池。大きなパン工場の少し先に、屋根瓦が密集した新興住宅街があつて、それは稲の海に浮かぶ島のようなだった。博士の家は川沿いだけど、どれなのかは分からなかった。そんなことより、なんて小さなところにぼくは住んでいるんやかと博士は思い、自分が大きくなったようにも、淋しいようにも感じた。

みんながしばらく放心したようにその光景を見つめていた。頑なに先を急いでいたムルチさえ、食い入るようなギョロ目で見つめていた。

やがてムルチは眉間に皺をよせ、本当に怪獣使いの老人みたいな顔つきになった。またかすかに唇が動いて、声にならない言葉を吐き出した。

ナカヘンデ。ナイタラアカン。

気のせいかもしれない。ムルチの唇がそんなふうに動いたように思えた。

見てはいけないものを見てしまった気がして、博士はまた視線を風景に戻した。

風がひときわ強く吹いた。すると稔り始めている稲穂の先端が赤い光を宿して、風にあわせて水田の中を行ったり来たりした。さわさわという音が聞こえてきそうだった。

そして、それは突然やってきた。

ほんの一瞬のことだ。住宅街の建物はみんなきつちりした区画で同じ方向に建てられている。その屋根瓦がいつせいに夕陽を反射して、鈍い輝きを放った。

あ、とか、うわあ、とか誰からともなくうめき声のようなものが漏れた。

それに続いて、博士には聞こえたのだ。聞こえるはずもないのに、本当に聞こえたのだ。

笑い声だった。一人ではなくて、たくさんの方の笑い声だった。今、あの家々の中で、タンタンタンと長ネギが刻まれ、味噌汁のふんわりした湯気が漂い、お腹を空かせた子供たちが食卓に集まり、早く帰ってきた父さんと母さんが、きょうの出来事を楽しげに話している時のような、さりげないけれど満ち足りた笑い声だった。いくつもの家の中から屋根をアンテナにして、一気にここまで送り届けられたような、そんな感覚だった。

それが続いたのはほんの少しの間だった。博士は息を殺して耳を澄ましたし、それでも苦しくなることはなかったから、ほんの十秒か二十秒だったにちがいない。

やがて、笑い声は遠くなって、自分の心臓の音がかわりに聞こえてきた。

力強く脈動し、体の中を駆けめぐるものを強く感じた。

目眩がした。

眼下を流れる赤黒い川も一緒に脈打っていた。

すると風の音が戻ってきて、お腹がぐうと鳴った。

太陽はもう地平線にかかっており、空はもう夜の色になりかけていた。

ナカヘンデ。ナイタラアカン。

さつき目に焼き付いたムルチの唇の動きを思い出した。不思議だし、それ以上に身につまされた。泣いたらあかんのは、ぼくや。ムルチがなんでそんなこと言うんや。泣いたらあかんのは、ぼくや。

博士の中の深いところで、もやもやとした感覚が急に大きくなって喉を突き上げた。

考える間もなく、目頭が熱くなった。

⑤ 泣かへんもん、と思った時にはもう涙がこぼれていた。手で押さえようとして、そんなことでも無駄だと分かり、すると、

後から後から溢れ出した。

泣き声は出さなかった。でも、自然に裏返ったような声で、えつ、えつと嗚咽が漏れた。

(川端裕人『今ここにいるぼくらは』)

問一 — 線部①「目があつた時、博士は自然と胸を張った」とありますが、このときの博士の気持ちを説明しなさい。

問二 — 線部②「探検の意味がにわかにはと色づいて」とありますが、これはどのようなことの比喩ですか。六十字以内で具体的に説明しなさい。

問三 — 線部③「でも、もっと複雑な気持ちだった」とありますが、このときの博士の気持ちを説明しなさい。

問四 — 線部④「それにあの中には茶色い大きなトノサマバツタがいた」とありますが、本文全体からトノサマバツタは博士にとってどのような存在だと読み取れますか。そのように読み取れる理由をふくめて説明しなさい。

問五 — 線部⑤「泣かへんもん、と思った時にはもう涙がこぼれていた」とありますが、博士はなぜ涙を流したと考えられますか。※以降の文章を読んで、百字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(注1)

コスタリカ人たちと話しているうち、「平和」という言葉が持つ概念^{がい}について、私は日本との三つの違い^{ちがひ}に気がついた。

一つ目は、消極的平和と積極的平和の違いである。

日本では、平和という言葉は戦争とセットで語られることが多い。日本では多くの人が「戦争(などの悲惨なこと)がないこと」を「平和」と考えているからである。意識的にそう定義している人は多くないかもしれない。むしろ、無意識的にそう考えている人が多いのではないだろうか。戦争は、あらゆる意味で平和とは正反対にあるもので、それ自身は何ら不思議なことではない。だが、戦争の話の時にしか平和という単語がほとんど出てこないのは、いささか奇妙な話ではないか。

コスタリカでは、もちろん戦争や暴力などが話題に上った時にも、平和という言葉はよく使われる。だがそれだけではなく、第3章から第5章まで見てきたように、民主主義や人権、環境といった話の時にもよく聞かれる。それは、それらの概念を単なるシステムではなく目指すべき方向性、つまり価値観として捉え、しかも何かしら前向きなものとして考えているからに他ならない。

日本のようなパターンを、私は「消極的平和」と名づけている。これは、平和の反対(仮にここでは「暴力」という言葉で定義する)に反対するという意味だ。暴力がなければ平和だというのは、確かにひとつの平和の定義になりうる。ただし、それだけでは平和の本質そのものを言い表すことは難しい。なぜなら、それは『平和の反対』の反対^①という意味でしかなく、「平和」そのものを直接的に表現していないからだ。

それに対して、コスタリカ人たちのような考え方を「積極的平和」と呼んでいる。これは、平和という概念が持つ本質的な性格を直接的に表している。それは楽しかったり、うれしかったり、安らかだったり、愛があったり、幸せだったといった、何かしら「ポジティブ」な感情を寄せ集めたようなものだ。この考え方に従えば、私たちはいったん平和の反対側に行って、その逆側^②に戻るといふプロセスなしに、直接的に平和に向かうことができる。

①消極的平和には、もうひとつ弱点がある。身の回りにこれといった不満がないと感じてしまった時点で、平和への努力に対する関心が薄れがちになってしまうことだ。また、遠い国や過去の戦争など自分とは関係ないという態度にも容易につながって

しまう。つまり、何か悪いことが起きたとき、はじめて「スイッチ」が入る仕組みになっているのである。

それを補う役目を果たすのが、積極的平和である。②積極的平和には、オン・オフのスイッチがない。常にスイッチが入りつ

ぱなしの状態なのだ。現状がどうであれ、さらによい状態を目指そうという姿勢こそ、積極的平和の概念に他ならない。もし悪いことが自分の身の回りや世の中で起こっていても、それに気付かなかつたり、あるいは気付いていても目をふさいだりしていれば、消極的平和のスイッチはオンにならない。

さらに、平和という概念が持つ本質的な方向性は、何かしら前向きで、ポジティブなものであるはずである。平和のための戦争や侵略などありえないし、平和のための環境破壊もあるはずがない。いったん暴力の方向に話を振らなければ平和を語れないとすれば、平和は常に何かの反対でしかありえなくなってしまう。そうすると、平和とは「何かに反対するもの」と定義されてしまい、平和という概念が本質的に持つ「肯定すること」という性質に反してしまうことになる。その意味でも、消極的平和の概念は、積極的平和に比べて脆弱^{ぜいじやく}なのだ。

ただし、消極的平和が間違っているわけではない。人間とは弱い存在であり、常に後ろ向きに引っ張ろうとする力が、いつでもどこでも誰にでも働いているからだ。それに対抗^{たいかう}するためには、後ろ向きに引っ張ろうとする力を認識し、それに対応しなければならぬ。ただ、それだけでは不十分だということだ。消極的平和と積極的平和を併せ持ってはじめて、私たちは暴力に對抗しつつも、平和へ向かって前に歩みを進めることができるのである。

二つ目は、「点の平和」と「線の平和」の違いである。

「点の平和」とは、ある瞬間の個人や社会などの状態を切り取って、それを分析したもの^{せき}を指す。たとえば「日本は平和だ」などと言われる時には、「点の平和」と「消極的平和」が結びついた平和概念に基づいていることが多い。つまり、今現在、物質的には何不自由なく暮らし、戦争もないし、とりあえず犯罪被害にも個人的にはあっていない。もちろんそうでない人もたくさんいるのだが、たまたま現時点で自分や身の回りでそういうことが起きていなければ、「私(日本)は平和だ」ということになる。

一方、「線の平和」とは、人間や社会の思想や行動、理念がどちらに向かっているかという方向性を考えるものだ。コスタリカやそこに住む人びとが「平和だ」と言われる場合は、現在の社会状態ではなく、彼らや彼らの社会が目指す方向性のことを指している。実際、現在のコスタリカ社会は増え続ける貧困層や汚染された川や都市の大気、治安の悪化など、「点の平和」的視

点で見れば悪い面がたくさんある。多くのコスタリカ人たちも、それを認識している。にもかかわらず、多くのコスタリカ人たちが自らを「平和主義者だ」と言い切るゆえんは、彼らが常に平和を求めて「動き続けている」という自負があるからだ。

③ これらの二つの平和も、消極的平和と積極的平和のように、相互補完関係にある。どちらかがどちらかより上位にあるわけではない。たとえば、モノにあふれ、何不自由ない生活をしていれば、「点」で見ればそれは平和かもしれない。しかし、そういった生活をしている人が、漠然とした未来に対する不安感を持っていたとしたら、その人は「線」では平和ではないことになる。逆に、貧しくて三度のご飯を食べるにも苦勞している人は、「点」で見れば平和ではないかもしれないが、未来への夢と希望に満ちあふれていれば、「線」では平和といえるだろう。

(足立力也『平和ってなんだろう——「軍隊をすてた国」コスタリカから考える』)

(注1) コスタリカ……中央アメリカにある国。

(注2) 第3章から第5章まで見てきたように……この文章は第6章にあたります。

(注3) プロセス……過程。

(注4) 脆弱……もろくて弱いこと。

問一

——線部①「消極的平和にはもうひとつ弱点がある」とありますが、これより前の文中ではどのような弱点が述べられていますか。次の文の A と B にそれぞれ適当な語句を当てはめて答えなさい。

消極的平和は

A

ので、

B

という点。

問二

——線部②「積極的平和には、オン・オフのスイッチがない。常にスイッチが入りっぱなしの状態なのだ」とはどのような状態を指しますか、具体的に答えなさい。

問三

——線部③「これらの二つの平和も、消極的平和と積極的平和のように、相互補完関係にある」とはどういうことですか。「これら二つの平和」の特ちょうを明らかにして、説明しなさい。

三

次の各文の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 葉がキいて快方に向かつてきた。
- (2) カンセン道路を走る。
- (3) 友人を生徒会長にオす。
- (4) 彼女はドキョウ満点だ。
- (5) 音楽はムジョウの喜びをあたえてくれる。

このらんには
何も書かない
こと

10 鷗友学園女子 1次